

式 辞

高校生活最後の定期試験、それに続く冬季補習も終わり、二学期締めくくりの登校日、朝、外を見ると、真つ白な、雪国と見まがう風景が広がっていました。休校で始まった異例の高校生活の締めくくりも、観測史上初めてという、まさにこれまでに例のないかたちになりました。このことに象徴されるように、異例づくめの高校生活でしたが、それを乗り越えて、卒業という一つのゴールまで走りきった九八回生。その姿を、三年ぶりにお越しいただいたご来賓の皆さまにも見ていただけることを、本当に嬉しく思います。何よりも、この苦しい状況の中で、学校運営にご協力いただいた保護者の皆さまには、感謝の念でいっぱいです。ありがとうございました。

これまで長年にわたって当たり前に行われてきたことが、次々に取りやめ、あるいは縮小、あるいは変更がなされてきた三年間、生徒の皆さんにとっても保護者の皆さまにとってもこれまでにないご苦労があったことと思います。その苦勞を乗り越えての、この卒業式、皆さんの晴れ晴れとした顔を見て、胸に迫るものを感じています。

入学式場で休校を告げられ、その後は分散登校。とくに土佐中以外の中学校から入学した皆さんにとっては、本当にどうしていいかわからない毎日が続いたことと思います。その年の高校県体は中止、初めて高知県で開かれた全国総文祭はWebでの開催となりました。さらに高校生活の一大イベントであったはずの修学旅行も延期、運動会は縮小した無観客開催となりました。その秋にはすこし感染も収まり、百周年の記念式典は実施されました。希望の光が垣間見えたのもつかの間、その年末年始に再度感染状況が悪化し、向陽祭も校内だけで半日の開催になりました。二年生になっても感染の状況は一進一退を繰り返し、結局修学旅行は実施できないまま、最後の年を迎えました。すこしずつ平常に復したとは言え、春の遠足はこの学年のみ延期。どうしてここまでとその不運を嘆くしかありませんでした。

しかし、そんな大変な状況の中でも、皆さんはペースを大きく乱すことなく、自分を磨く毎日が続けてくれました。スタートで躓いたにも関わらず、学業面ではこれまでの学年に勝るとも劣らないレベルに達しました。部活も総文祭やインターハイに多くのクラブが出場し、登山部や棋道部のように全国入賞を果たす活躍を示してくれたクラブもありました。そうした表だった成果はなくとも、それぞれが地道な取り組みを続け、ひとりひとりが自分の中に大きな成果を残しました。

さらに仲間とともにやり遂げたさまざまな学校行事、とくに、初めて保護者の方に見ていただいた運動会での皆さんの躍動する姿。後片付けまでやり遂げて、充実した表情でグラウンドを去る皆さんには百年の本校の歴史が確かに刻まれていることを実感しました。

そうした毎日を積み重ねて成長した皆さんは、これからより大きな社会の中に入っていきます。その社会は歴史的とも言える大きな変動の中にあります。昨年だけでも、ロシアのウクライナ侵攻、我が国では元首相の射殺という、衝撃的な出来事が相次ぎました。このような出来事の底に、わたしは、長い間、すくなくとも建前の上では当然とされてきた、ひとりの人間の命は重く、どんな人であれ、その思いはないがしろにされてはならないということが、当たり前でなくなってきたということを感じずにはいられません。

コロナでもそうです。連日報道される死亡者数の背後にある無数の悲しみはほとんど無視されます。ネット通信でもそうです。相手を徹底して攻撃する誹謗中傷の広がり、それを受ける人の思いなど全く顧みられません。そして、このような状況を生み出しているのは、他者を自分の敵か味方か、自分にとって役に立つ存在か、そうでないかのみで人を評価し、それに基づいて対応を決めてしまうという態度ではないか、そんなふうにわたしは思っています。

こうした態度・考え方が大きな悲劇を生んだのが、皆さんが小学校六年の時に起こった相模原殺傷事件です。この事件では、重い障害を負っている人は生きている価値がないと思い込んだ犯人がたくさんの人を殺傷しました。その事件の衝撃もあり、その翌年、校長に就任して初めての入学式で、わたしは皆さんに対して、その場に灯りを点し、まわりを照らす人であってほしいということを話しました。四十年あまり本校で過ごす中で、自分の願いとして生徒に求めようとすることを表現するのにもっともふさわしい言葉として、やっとたどり着いた言葉でした。どんな人に対してもその人がその場において安心できる、希望を持つことができる、そんな場をつくることができる人、それが本校の求める人材だということです。

この周りを照らす、灯りを点すことは、先ほど述べたような、相手を自分にとって役に立つかどうかと判断しては不可能です。役に立たないと判断された人にとっては、その場は真っ暗になってしまいます。そうではなくて、人はみなそれぞれが、何かの役に立つという以前に、基本的に価値ある存在として認められなくてはなりません。

この考えを近代倫理の基本として唱えたのがドイツのカントです。かれは「あなたの、あるいは他の人の人間性を単に手段としてのみ扱ってはならず、同時に目的として尊重しなければならぬ」と述べています。何かの役に立つ手段としてだけではなく、それ自体が価値のあるものとして扱うという意味であり、例えば重い障害のある人も、人間として尊重されるべきであるという考え方の根拠です。

人間の尊厳とか、人権の尊重という、今では手垢にまみれたかのように扱われる言葉は、この考え方を前提としています。残念ながら歴史の中で、何度も踏みにじられてきました。そして、例えば戦争のように、この尊厳が踏みにじられて大変な状況に直面してしまった後、この考え方の重要性が改めて認識されるとい

うことが繰り返されてきました。第2次大戦後の世界は、そして日本は、このカントの思想をかたちにすることからスタートしました。

こうした歴史が遠い過去として記憶から薄れてきた今、また暗い闇が世界に広がろうとしています。そんな時代にあつて、私たちができることは限られているかも知れません。しかし、せめて自分の周りだけでも明るくしていつてほしい、もしかしたらそこから光が社会に、世の中全体に広がっていくかも知れない、そうなつてほしい、今、痛切に感じています。

先ほどのカントは思想的には啓蒙思想の大成者とされます。この啓蒙思想とは、暗さを開くという言葉の通り、迷信にとらわれて真理が見えない状態から人々を解放するという意味です。そしてこの言葉は英語では *enlight* と表現されます。まさしく光をもたらす、灯りを点すということです。そして、この啓蒙思想は、天動説から地動説への転換に象徴される科学的真理の広がりから確立されていきました。そのことが物語るとおり、神話的な世界観を乗り越え、学問を通じて見つけ出された真理を求めようとすることを基本とするものです。

暗さを増す社会に、少しでも光を点す存在であつてほしい、この土佐で、多様な仲間と繋がることの喜びを知り、より高いレベルの知を求めて、自分を磨いていく姿勢を育んできたみなさんにはそれができるはずです。

卒業という一つのゴールを迎えましたが、皆さんはまた新たなスタートラインに立ちます。急がなくてもいい、回り道をしてもいい、自分なりのペースで、自分を磨き続け、すこしずつでも、輝きを身につけていくください。その輝きが、いつか周りを照らすようになることを願っています。

ご来賓の皆さま、保護者の皆さま、そして在校生の皆さんとともに、もう一度九八回生の皆さんに、心からのおめでとうと、これからがんばれとの思いを送つて、式辞といたします。

二〇二三年一月三一日

土佐高等学校長 小村 彰